

委員の発言の特徴点

組織破壊を許さないたたかい

▼分裂組織は、労働組合ならざる労働組合であり、組合員を不幸にする。支部・分会が常駐・泊体制をとり、組織問題について組合員と総対話を行い認識一致を図った。これは、何も知らない組合員を生み出した18春闘の課題を克服するたまたかいであった(大宮) ▼長野地本は、過去の組織分裂により組織が弱体化したことから、組織分裂策動を絶対に許すことはできない。組織分裂で幸福になる者など誰もいない(長野) ▼東京地本の不正な組合費の使用について、徹底的に調査すべきである。あったことをなかったことにはできない(盛岡) ▼水戸・東京・八王子地本で発生している脱退懲罰は、不当労働行為を許さないと言っているが、やっていることはそれ以上だ(新潟) ▼東京地本の一部のエルダーに、莫大な退職金を支払ったことは、真面目に働いているエルダー組合員も許さない。しっかり調査して明かにすることを求める(高崎) ▼無責任に脱退をさせるやり方が、後にJRひがし労働組合に加入した当時の組合員のやり方と似ている。18春闘の大敗北総括を認めず、組合員に真実を伝えなくて引き回す行為は許せない(仙台) ▼定期委員会をボイコットすることは、絶対に許すことはできない。結局、決めたことを守らず、最終的に逃げ出した。組合費は、役員が好き勝手使っている(大宮) ▼ワン・デタラメでごまかされている水戸・東京・八王子地本で苦しむ仲間を救うことが重要だ(千葉) ▼職場集会において、「脱退すること」を選択肢に入れている(大宮) ▼自分八王子出身だが、組織の再建に向けて、「組合員のためのJR東労組を守る八王子の会」の仲間と共に奮闘して(きかへ)

業務課題について

▼ジョブローテーションに対して、反対だけでは組合員を守れないことから、職場の声を要求へと高めるために議論を積み重ねた。そのこともあり、組合員と共に面談に向き合うことができた(盛岡) ▼乗務員基地再編



に対して、建前議論で組合員を振り回すことのないように、地本全体のたたかいとして議論をつくり出した(盛岡) ▼営業部会として、全組合員が納得と共感を得る運動をつくり出す(営業) ▼感電事故、墜落事故、触車事故が連発し、事故の連鎖が止まっていない。部会として命を守り、安心して働ける職場をつくり出す(工務)



職場で発生する問題の解決に向けて

▼第三者機関を活用すべきと水戸・東京・八王子地本の一部指導部は繰り返し言ってきた。私たちは不当労働行為を許したわけではない。当事者とたたかう決意を明確にし、現場長への抗議等を行い、不当労働行為を止めてきた秋田・大宮地本のたたかいを学ぶべきである(運車) 国鉄改革の教訓は、様々な施策に対して背を向けず、組合員と共に担うことを通じて、組織を強化した。常にリーダーの献身性があつた。国鉄改革を経て、会社の発展を目指し、労働条件の向上を求めた結果、今の会社を築いた事実がある。今踏んばらないとJR東労組は崩壊する。だからこそ、JR東労組の必要性を訴え、信頼を回復していく(かんり) ▼電話で「まだ組合入っているのか」と話がされ、何時何分現認と伝えると、それ以上の言動はなくなった。このように態度表明を行い、職場で対応していくのが重要だ。そして、組合員が自覚したたたかいが必要である(横浜) ▼要員不足のため、6ヶ月間年休が入らなかった。検証運動を積み重ね、会社が要員不足を認め改善に努めていくことを確認した。職場のたたかいはなくして、会社は動かない。組合員の生の声を聞いて運動をつくるべきだ(仙台) ▼不当労働行為に対して、各職場でチェック機能を強化する運動をつくり出し、不当労働行為を止めてきた(秋田)

発言された17名の委員(順不同・敬称略)

- 【盛岡】其田洋輔、大村博行【秋田】島山翔【仙台】皆本起良【千葉】下村悟史、関文弥【横浜】木村正行【大宮】鶴野経洋、川澄新一【高崎】中山透【新潟】清水崇之【長野】曲尾優一郎【営業】能登隆【運車】伊藤千恵蔵【工務】七海勝彦【かんり】渡辺昌則【きかへ】仁戸田茂樹

「新生JR東労組宣言」のもと全組合員で運動をつくり出し未来を切り拓こう!

加藤書記長 総括答弁(要旨)

JR東労組は18春闘を「大敗北」と総括し、これまでの運動を反省すると共に、組合員の声を受け止める新生JR東労組運動をつくり出してきました。

19春闘以降「新たなジョブローテーションの実施について」をはじめ、今日段階まで50回を超える団体交渉等の場で議論を行ってきました。そして、2018年4月の臨時大会以降、100名を超える仲間が新生JR東労組へ再結集し、2020年をスタートしてきました。

しかし、職場の仲間は、新生JR東労組をどのように実感しているのでしょうか。またまた、新生JR東労組を実感している組合員・離脱者は、多くはないかと思っています。そして今の現実を、自らに矢印を向けて実践していかなければならないと痛感しています。

「組合員のためのJR東労組を守る八王子の会」の共同代表から、「本部と地本がもめていることなんてどうでもいい。やりたいのは仕事」「自分は出向に行っているが、出向に行っているから一切連絡が来ない。機関紙も来ない」という職場の声を聞きました。

また、職場の方が、相当切羽詰まって、ある地本執行委員の方に電話してきて、「拡大執行委員会、職場集会で、本部、9地本、美世志会に対して、くそみそに言っている」「本部はたたかわない。話を聞かない。そもそも来ない」「役員はスタンスは、新組合でいく。今後の分会は自分達で考えて欲しい。辞めるもどうするも後は各自の判断だ」「東京地本の金の関係は、取り扱いは何の問題はない」「もう宗教に近いと感じる。やぶれかぶれで徹底して会社とやっつけてやるという感じ」と言ってきたそうです。

まったくもって無責任、組合員の引き回しだということです。そして、地本執行委員が彼に様々話をしていること、「本場に電話して良かった。聞いていた話と全然違つ」「仲間内では18春闘以降「空白の2年間」と言ってきた」「何も運動もなかった。あったのは本部批判だけ」「だからみんなの中に残っているのは、本部はそんなんだ」と思っていたと言われたそうです。

指摘を受け止め、運動を前進させていく

長野の仲間から、「バスの組合員が、もう、ごちゃごちゃしないほしい。職場は大変。業務問題が山積している」「本部のやり方が気に入らない」「新生JR東労組と言ったが、何も無い。結局、本部は前に戻っている」「現場は、どうだっていい。こんなになつて何やってんだ」と本部に対する指摘をいただきました。「本部は前に戻っている」といった指摘は私の中に突き刺さり、本部としても議論しました。山口委員長からも、「言われて当たり前」「本部が正しいと色濃く出ている」「相手の現実を踏まえていない」といった指摘を受けました。

何とか組織を一つにするために実践してきました。しかし、認識が合っていないときの実践が今、本部には問われているんだと、そのように受け止めております。

20春闘の満額獲得に向けて、全組合員で奮闘しよう

改めて、「新生JR東労組運動宣言」を提起しました。理論の正しさは絶対的な基準ですけれども、理論が正しいからといって組織化できるとは限りません。リーダーの献身性についてや、今踏ん張らないとJR東労組は本場に駄目になるといった発言もありました。そして、組合員の生の声を聞こうじゃないかといった発言もありました。私たちは、組織つくりの観点からすると、理論的要素があることを本部はしっかりと肝に銘じて奮闘していく次第です。

20春闘は、JR東労組組合員の基本給、定期昇給を含め一律6、000円を引き上げること。グリーンスタッフ・エルダー組合員の基本賃金を6,000円引き上げること。定期昇給を実施し、昇給係数は「4」とすること。「第二基本給制度」の凍結、企画業務を担う組合員の待遇改善を求めていくと提起しました。

その根拠ですが、2019年度のJR総連賃金実態調査(JR東